

**(仮称) 狭山市地域福祉推進計画
団体ヒアリング調査報告書**

平成26年3月

狭山市、社会福祉法人 狭山市社会福祉協議会

第1節 ヒアリングの概要

(1) ヒアリングの目的

(仮称)狭山市地域福祉推進計画の策定にあたり、市内の福祉関係団体・事業者による活動の様子、より活動を推進するための方法について、第3次調査を配布した中で、ヒアリング調査に協力の意向を示していただいた86団体のうち30団体に、調査票に基づいてヒアリングを実施しました。

(2) 実施概要

- ・第3次調査回答団体：110団体
- ・ヒアリング調査可能団体：86団体
- ・調査実施期間：平成26年1月20日（月）～2月7日（金）
- ・実施団体：30団体（順不同）

柏原地区自治会連合会、社会福祉協議会入曾支部、堀兼地区民生委員・児童委員協議会、NPO 法人生きがいを支援する会、NPO 法人なごみテラシマ、NPO 法人ユーアイネット柏原、NPO 法人ぽしえっと、ふれあいサロンわかば、はいつ花水木会、ふれあいサロンつくし、しゅっぽっぽの家、サロン・ド・たんぽぽ、きらきらぼし、車椅子と仲間の会、狭山手をつなぐ親の会、狭山市精神障害者家族会（狭山こぶしの会）、フレンズ、狭山ハンディスポーツクラブ、さやまのペンギン村、点字 虹の会、狭山市赤十字奉仕団、狭山老後を考える会、ささえあいグリーンハイツ、狭山台地域づくりを進める会、街活さやま、子育て支援ペンギンルーム、笹井ふれあいの会、青空の会、富士見・狭山台地域包括支援センター、子育てプレイス稲荷山（中央児童館）

第2節 ヒアリング対象団体の活動概要

表 ヒアリング対象団体の活動概要

名称	代表者・担当者氏名	活動分野・内容
1. 柏原地区自治会連合会	半貫 敏夫	住民同士による地域コミュニティの活性化を図るための諸活動
2. 社会福祉協議会入曽支部	五藤 正巳	自治会・民生委員との連携で高齢者の昼食会、見守り活動、啓発活動
3. 堀兼地区民生委員・児童委員協議会	奥富 孝一	見守り活動や訪問調査など、福祉に関する身近な地域の相談活動
4. NPO 法人生きがいを支援する会	廣瀬 猛	高齢者等に尊厳ある自立と自己実現を支援する活動
5. NPO 法人なごみテラシマ	寺島 康子	高齢者・障がい者への福祉有償運送
6. NPO 法人ユーアイネット柏原	小澤 浩	柏原8区での高齢者等への生活支援、コミカフェ
7. NPO 法人ぽしえっと	阿利 澄江	狭山特別支援学校の近くで、障がい児の放課後デイサービス
8. ふれあいサロンわかば	佐藤 みどり	柏原8区で行う高齢者に対する月2回の昼食会、たまり場活動
9. はいつ花水木会	込山 千枝子	新狭山ハイツで行う高齢者等に対する月1回の昼食会、たまり場活動
10. ふれあいサロンつくし	鈴木 玄美	コート狭山台で行う高齢者に対する月2回のたまり場活動
11. しゅっぽっぽの家	大野 和子	未就園児とその保護者に対する月2回のたまり場活動
12. サロン・ド・たんぽぽ	香田 弘信	富士見2丁目で行う高齢者に対する月1回のたまり場活動

名称	代表者・担当者氏名 (連絡先)	活動分野・内容
13. きらきらぼし	内田 美香	東急台で行う未就園児とその保護者に対する月1回のたまり場活動
14. 車椅子と仲間の会	苅谷 浩三	車椅子でも住みよいまちづくりを目指した諸活動
15. 狭山手をつなぐ親の会	佐藤 真砂子	知的障がい児者が心豊かに生活できるようにするための諸活動
16. 狭山市精神障害者家族会(狭山こぶしの会)	神田 芳夫	心に病を持つ人の家族による支え合い、交流、学習などの活動
17. フレンズ	佐藤 順子	発達障がいのある親子による当事者同士の支え合い、交流活動
18. 狭山ハンディスポーツクラブ	岡村 陽子	月1回の卓球を中心に障がいがあってもスポーツを楽しむための活動
19. さやまのペンギン村	門坂 美恵	障がいがあっても安心して暮らせるよう立ち寄って安心できる場づくり
20. 点字 虹の会	森田 順子	視覚障がい者のための点訳活動や小学校等での点訳指導
21. 狭山市赤十字奉仕団	黒瀬 節子	施設でのボランティア、災害時の募金活動等、地域に根付いた活動
22. 狭山老後を考える会	澤田 幹夫	老後問題の学習、施設でのボランティア
23. ささえあいグリーンハイツ	石渡 国男	グリーンハイツで高齢者に対する見守り活動
24. 狭山台地域づくりを進める会	土田 博	狭山台地区のまちづくりを住民目線で進めるための諸活動
25. 街活さやま	江頭 誠治	元気大学でのコミカフェの他、地域を活性化するための諸活動
26. 子育て支援ペンギンルーム	佐藤 陽子	入曽公民館で未就園児とその保護者に対する月2回のたまり場活動

名称	代表者・担当者氏名	活動分野・内容
27. 笹井ふれあいの会	渋谷 ヒサ子	水富第6区で高齢者や子育て中の親子に対するたまり場活動
28. 青空の会	富塚 大二郎	市内各地で開催している青空サロン等での健康づくり活動
29. 富士見・狭山台地域包括支援センター	西原 恭子	地域の高齢者への総合相談や介護予防、介護支援専門員への支援
30. 子育てプレイス稲荷山（中央児童館）	中原 松江	乳幼児や児童を対象に交流、居場所づくりなどの諸活動

※ 上表は、平成26年1月1日を基準日として作成しました。



第3節 主な意見

① 地域福祉への市民の参加促進に関すること

ア 福祉教育の推進

- 障がいのある子どもとない子どもが、同じ環境で共有することを大事にしてほしい。
- 県立高校への入学を希望する障がいのある子どもが全員入学できるようになってほしい。
- 家庭がバラバラだと子どもに問題行動が出て来る。子どもが幼いうちの、もっと早くからの支援が必要。
- 子どもには障がい者との交流を含めて、様々な体験が必要。まずは飛び込んでもらい、どう声かけをするのかなどを知ってほしい。
 - 福祉教育として点字指導などをするが、古くなった点字器を福祉教育をした学校等へ提供することで、引き続き、子どもに関心を持ってもらえると良い。(社協等で器具を買替した際には、そうしたことをしてほしい。)
- 市との協働事業として、地域の史跡を管理しているが、授業の一環として中学生に対して史跡の説明と史跡の清掃作業をすることで、子どもたちが自分の住んでいる地域を知ってもらえればと思う。

イ 意識啓発・福祉学習の推進

(ア) 地域のつながりと支え合いの必要性

- 自治会役員、育成会、民生委員などを通じて、顔見知りができ、高齢者の日中の様子を知ることとなったため、自治会の中に「福祉を考える会」を立ち上げた。
- 自分ができることを無理しないでやることで、団体を辞めた人でも手伝ってくれる人がいる。
- やっている皆が楽しければ、参加者も楽しい。
- まずはやってみる。そこから出来ること、出来ないことのラインを引くことが必要。
- 障がいがあっても出来ることを出来る範囲でやっている。
- 会社の退職後、会社とは最低限のつながりで、自分の生活圏に密着していこうと思った。
- 若い人の呼び込みは難しいので、女性やシニアをどう活用するか。
- 団体のスタッフは不足しているが、参加者も一緒に手伝ってくれることで、参加者も明るくなってきた。

- 婦人会も老人会もなく、虐待を含めて、自分の地域がどうになってしまうのかという不安があった。
- ボランティアをすることで意識が変わった。福祉に目を向けるようになった。
- やらないなら、やらなくても済むが、地域の実態を知っているから、自分がやらなければどうするという気持ちで始めた。
 - 「こういう会合が他にもあれば良いのに・・・」という参加者のつぶやきから団体の活動をスタートさせたが、既存団体との差が住民に分かりにくく、スタッフ集めや参加者集めで苦労した。
 - 発達障がいはいは、知的に問題がないことが問題で、なかなか保護者が告知できる自信が持てないので、当事者や保護者同士の支え合いが必要。ボランティアに来て見た目でも分からず、対応が難しいので、継続性がないと信頼関係の構築が難しい。
 - ボランティアをしていて、時間が取れない辛さはあるが、やりがいもある。「人が幸せを運んでくれる。」と人とのつながりを大切にしている。
- 育メンが流行しているが、男性は自発的に男性同士で話すことが少ないので、そうした場所をつくるようにし、作業を通して他の子どもとも関わるようにしている。
 - シニア世代による子育て支援、シニア世代の活用として祖父による子育て体験の場があっても良い。
 - 閉じこもりがちの子どもは、身体は大きくなっても、精神年齢は閉じこもった年齢のままなので、支援が必要。虐待防止という点からも、寄り添って外出できるようになると良い。
- できるだけ顔を合わせる形で対応し、地域に埋もれている存在を仲間に加えていきたい。
- 周囲に支えられたという気持ちがあるので、自分がネットワークの糸になっていきたい。
- 頭数を増やしても仕方ない。引っ張っていく存在（リーダー）を増やして行く必要がある。
- 褒めてもらっても嬉しくない。手伝ってくれる人の方が嬉しい。
- 障がいのある人の家族でないと分からないこともあるので、家族支援を大切にしている。
- 元気な高齢者が多く、プライドもあり、サービスに繋がらない。また、動けなくなると地区を離れてしまう。
- 社協に頼んでも、なかなかアクションに繋がらないとの話を聞く。大きな組織で市全域をカバーするのは難しいので、もっと地域に密着した組織が必要なのではないか。小さな拠点を増やす仕組みが必要。

- 少人数で集まった時に、定年になったので、これまでお世話になった地域に何かしようという話になり、NPO を立ち上げた。
- 地域の人たちの意識の変化により、通報が増え、孤立死が減少していると感じる。
- 自治会員同士の助け合いができるよう、地域コミュニティづくりが重要。地域コミュニティができれば、地域防災や地域防犯にも役立つ。
- 若い人をどう参加をさせるかは課題。
- 地域には優秀な人材がいるので、そうした人たちをどう舞台に上げるかが大切な役割。

(イ) 福祉学習

- 市役所に事務局があるが、市職員による団体への認知度が低いので、まずは市職員に活動を知ってほしい。
- ボランティア講座で双方向に気軽にやり取りできると良い。
- 地域は人材の宝庫。ボランティアを活かすことで、他の地域活動も活性化し、情報拡大、地域力の向上の他、地元を知るきっかけになったり、郷土芸能にも繋がる。
- 活動をしていく中で人権を守ることが重要。
- 困った時は自分で助けを求めることのできる障がい者も増えて来ているので、バリアフリーよりも、皆がアテンダントであることが大切。
 - 民生委員に対しての研修をしても、各自判断という対応が多いので、民生委員による差異が生じてしまう。質の向上のためにも教育・学習が必要。
 - 自治会について、福祉の認識がマチマチなので、自治会に対する研修が必要。

ウ 企業等の地域福祉活動への参加促進

- 今後、大学 4 年生の発達障がいのある子どもがいるので、就職活動を目指していくことになるが、他の人よりも作業に時間がかかるので、理解をしてほしい。継続性・反復性が必要なことを理解してほしい。
- 企業が良き企業市民になるため、儲けるだけではなく、地域での社会貢献をしてもらえるよう、どうタイアップを提案できるか検討していく予定である。

② 健康で安心して暮らせるしくみづくりに関すること

ア 相談支援体制の充実

- 保護者からの相談を受け、専門家への橋渡しをしている。(専門家・専門機関への相談の敷居の高さを解消する役割を果たしている。)
- 戸別訪問での話の中で、訪問結果について対応を協議し、必要に応じて地域包括支援センターへ情報を繋いでいる。

- 地域性を知らないと支援ができないので、地域の集まりに出て行って、顔を知ってもらってるところから始めている。地域の集まりに出ていくことで、相談につながっていく。
- 早い段階で関われると、問題が複雑化しない。問題が複雑化すると、問題の整理をしていくが、時間がかかってしまう。
- 「自助、共助、公助」というが、自助を上げる支援をしていく必要がある。
- 成年後見制度や社協で行っているあんしんサポートねっとの利用開始となるまでの空白期間に問題が生じないか不安がある。あんしんサポートねっとの利用開始までの期間を短くならないか。

イ 情報提供体制の充実

(ア) 地域福祉活動者としての視点

- 移送などの1つのサービスから、他の生活課題に広がっていくので、利用者の中から状況を掴み、他のサービスに繋げている。
- 自治会役員が現役世代なので、高齢者への理解が難しい。高齢者の声が自治会に届いていない。
- 対象者宅への戸別訪問、手ぶらでは行けないので、情報収集し、資料の作成をすることが大変。
- さやマルシェをもっと見てくれるようになってほしい。
- ちゃきちゃき倶楽部の終了者が1,000人を超えているが、終了後のフォローが不足しているので、サロン情報などの提供をできるようにしてほしい。
- 社協の存在、浸透していない、理解されていない。状況に応じた広報などが必要。
- 実際に利用するようになるまで、社協の存在が伝わってこない。
- 最近では団体に入らなくても情報の入手が可能になってきた。
- 家族が思いつめてしまうので、できるだけ早く団体の存在を伝えたい。そのために、市には広報や教育の場で周知してほしい。
- 福祉学習をしたいが、何を勉強すれば良いのか分からないので、どういう学習をすれば参加者が集まるのか、どう周知するのかなどの相談窓口がほしい。

(イ) 利用者としての視点

- 個々との関係ではなく、保護者同士のつながりができるような支援が必要。
- 情報を配布されても、使い方が分からないので、正しい情報を伝えることが必要。

ウ 地域での声かけ、見守り活動の推進

(ア) 自治会

- 団体の活性化のため、団体に自治会が介入してほしい。

- 単身高齢者の問題、自治会の役割が本来は大きい。
- マンションの隣の人に一度も会ったことがない。
- 自治会は行事が多く、役員の任期も短いので、顔が見える関係になる前に任期が終わってしまう。
- 地域での声かけや見守り活動にも繋がるので、自治会の中に高齢者のためのサロン活動などの位置づけが必要。
- 地域内に65歳以上が30%超、青少年が団地が出来た頃の1/4位になったが、自治会長は1年交代が多いので、継続的なテーマに取り組めない。
- UR、市、自治会で協議をし、どう地域づくりを進めるかが必要。
- 地域の特色として、他市町村・他地区からの流入によって地域が出来たので、お互いを知ることを重視したイベント等を開催している。

(イ) 民生委員

- 狭山市の「こんにちは赤ちゃん事業」のように、子どものいる家庭に対し、民生委員が全戸訪問するのは全国的に見ても珍しい活動である。
- 孤独死などの大変な事態に立ち会うと、民生委員を辞めたいとなってしまうので、専門家によるケアなどの体制整備が必要。
- 単身高齢者の見守り活動として個別に訪問をしているが、頑張りすぎると続かないし、民生委員の大変な面ばかりが伝わってしまうので、協力者などのサポート体制の整備が必要。

(ウ) その他

- 地域に入っていく難しさがある。
- 地域の人、ボランティアとの協力関係を築くのが今後の課題である。
- 自分たちのやれる範囲でやる。欲張ると続かなくなってしまう。
- これまで自治会と民生委員との話し合いが出来ていなかったが、最近、年1~2回できるようになった。
- 入曽地区の「福祉マップ」を作成。要見守り者の安否確認のため、見守りチェックカードを班長に配布している。

エ 災害に備えてのつながりづくり

(ア) 震災を契機としたもの

- 避難所が出来た時の協力体制をつくるものため、入曽地区で、支部社会福祉協議会を中心とした防災福祉サポーターを公民館サークルに依頼した。
- 東日本大震災を契機に地域のためにという想いが生じ、サロン活動をするようになった。

(イ) 市内避難者

(意見なし)

(ウ) 自治会

- 自治会は近くて遠い存在。

(エ) その他

- 災害時マニュアルの作成を提言しても、担当課が乗り気でない。
- 防災計画のアンケートを見ても、障がいに対する認知度の低さ、行政の想像力の欠如を感じる。
- 災害時での支援も踏まえて、障がい児を抱える方の地域でのつながりをつくるため、当事者団体と地区の民生委員・児童委員協議会による話し合いをしていく予定である。
- 災害時には、より緊急性の高い人がいるので、優先順位が出て仕方がないところがある。
- 自宅にいる時は良いが、外出時に災害があったら不安であるという思いがある。

オ からだとこころの健康増進

- サロンに来ている人のほとんどが介護保険を利用していない。高齢者同士の仲間づくりや介護予防の効果がある。
- 利用しやすい障がい福祉サービスの事業所を増やしてほしい。
- 当事者や保護者が立ち寄って安心できる場の提供が必要。
- 休憩中は話をできるが、話し合いになると話を出来ない。本来持っている力を認められずに、活かされない。他の人よりも長い付き合いが必要で、付き合いの短い人からは心理的バリアを感じる。
- 青空サロンなどの健康づくりは、介護予防にも繋がるので、今後、老人会などとタイアップできると、市民大学などで学んだ人材の活躍の場が出来て良い。
- 健康づくりをするには、引っ張り出してもらう場が必要。例えば、地域包括支援センターの2階に高齢者を集めて、体操できるようにするなど、建物を考えてほしい。
- 精神障がいについて、職場の健康管理としての学習の場をもってほしい。
- 家族支援のため、24時間365日の相談チームをつくってほしい。
- 介護予防など、市内を一律に対応するのではなく、一部の地域をモデル地域にして、そこを重点的にやって検証をしても良いのではないかと。

- 介護予防として中学校の武道場を借りて、2 団体が活動をし、チャキチャキ倶楽部終了後の受け皿としている。高齢者と子どもとの接点を持たせるために地域包括支援センターが仲介をして地域を繋げたが、縦割り行政の影響なのか、他の地域では同じことが難しい。

③ 地域福祉活動を推進するための環境整備

ア ボランティア活動への参加促進

a お金に関すること

- NPO では活動費の貸付をしてくれないので、誰でも新たな活動をしやすいように財政的支援をしてほしい。
- 団体の活動に必要な用具の追加購入費用が課題となっている。
- 自治会からの補助をもう少しお願いしたい。
- 支部社会福祉協議会の活動財源となる社協会費の集め方の工夫・改善をしてほしい。
- 活動に必要な道具について、100 円ショップでの購入や手作りが多いので、購入の助成をお願いしたい。(その都度での借用もある。)
- 備品の購入費用ではなく、日常的な運営費が必要であり、社協にはもっとサロンへの財政支援をしてほしい。
- 自治会の規模が大きいので、返って自治会の協力が得られにくい。逆に自治会への協力を求められてしまい、それが負担になってしまう。
- バザーの減少や鉛筆販売の中止による収入減となっており、貯金の取り崩しをしていても 15 年位で無くなってしまう。
- 賛助会員を増やしていく営業が出来ていない。
- 補助金・助成金は大体が 3 年限度なので、助成金終了後の財源確保が課題。1、2 年目で初期投資が出来たので、今後のランニングコストをどう確保するか。
- 会費や事業収入が急激に伸びることはないので、事業の幅を広げて、新たな補助金・助成金を得ることも考えていくことも必要。
- 市がどれだけ地域での支援を考えているかが問われている。
- 一部の自治会に話をし、一緒にイベントをして寄附金をもらって収入の一部にしている。
- 活動に対する制約が生じるので、発足時から助成金を使わずに自主財源で運営している。
- 自主財源を増やすために、年会費の増額も検討したが、もともとの年会費の金額が少ないこともあり、年会費を増額させても、それほど差が出ないので増額をしないている。

- 市役所などの補助金は、福祉やまちづくりなど担当課ごとに細かくお金が出るのではなく、住民が一番、地域課題を知っているのだから、住民が地域課題に優先順位をつけて使い方を決められると良い。

b 人材に関すること

- 同じような仲間で助け合うことが大切。
- 当初からやってきた人と団体を引き継ぐ人との世代間ギャップが難しい。
- 見学者が来ても、勉強会での議論が激しく、引かれてしまった。
- 年齢のギャップがあるので、同じような年代の人がいないと参加しにくい。
- 後継者の問題があるので、これからの10年に不安がある。
- 人員募集は口コミによるところが大きい。
- 会員の名前はあがるが、参加しているのは3割位。
- 団体の名前が知られることで、団体の加入者が少しずつ増えている。
- 今のスタッフは30歳代が多いが、思い切って代表を1年で辞めたことで、若い人がやってくれるようになった。
- 楽しんで、余り無理をしないことが大切。余り結果を求めないようにしている。
- 強制をしない、人の良いところを活かすことで、楽しい中で何かが育つ。
- 子育てサロンの参加者が、子どもが幼稚園や小学校入学後にスタッフになってくれる。
- 子育て世代による子育てサロンとしているが、仕事をしているお母さんが多く、ボランティアをしてくれる人が見つからない。
- 民生委員のOBや次期候補者によるサポート体制があると、民生委員の負担軽減と人材育成に繋がるので助かる。
- 課題としてメンバーの高齢化があるが、催し物（イベント）等をするとう若い方々が参加するので積極的に開催している。
- 社協の講座修了者で立上げ、約30年活動している。
- 元民生委員の方が立上げ。
- SSCCや元気大学での人材供給、皆無ではないが、方向性が内向きではないか。
- 最近「役員を出来ないから」と声をかけても、団体に加入してもらえない。
- カフェの新たな人材として30代の人に関わってくれるようになったが、まずは活動を知ってもらい、その後、活動に参加してもらい、口コミを活用しながら、その人の知人も活動に巻き込めれば、新たな人材の確保に繋がる。
- 人材確保として、団塊の世代からの反応がない。
- 中学校の3DAYSチャレンジを初めて受入したが、子どもの意識の変化を体験し、スタッフの意識も変化した。
- どんなに良い組織、仕組みをつくっても、良い仲間がいないとダメ。

- NPO 立ち上げから 10 年になるが、人数はほとんど変化せずに、立ち上げ当時からいる人員は約半数と、構成員の高齢化はしてきているものの、人員の入れ替わりはある。

c モノに関すること

- 車さえあれば参加したいという声がある。福祉有償運送についての調査を始めた。
- 生活に密着したことをすると効果的。
- 派手なことは単発で終わってしまう。毎日の積み重ね、地味な活動が重要。
- 社協事務所の作業室内のパソコンを他団体と共同で使用しているが、キーボードのキーが大変重くなっており、打ち込みに苦労しているので改善して欲しい。

d 情報に関すること

- 何かをしたいと思っても、何をしたら良いのか分からずに、途中で挫折そうになった。
- 利用者からの感謝が活動の救いになっている。
- 団体の存在を知ってもらいたい。
- 健康づくりを進める他団体や他市町村とのネットワークがないので、誰かが仲介してくれると助かる。
- 子育てサロンに参加する保護者の関心事として、保育園・幼稚園のことと病院のことがある。幼稚園などの PR をしてもらいたい。
- 同じような団体同士の交流がないので、団体同士の同じような悩みを相談できると良い。
- 民生委員とは地区定例会での顔合わせを今後予定している。情報発信や相互理解につながれば良い。
- 自治会との関係は、言わないでおこうとは思っていないが、現状では接点がほとんどない。転居前は交流があったが、転居してからは、態々紹介して歩くのもおかしいので、交流がなくなった。
- 団体に加入していて得られるもの、何とは言えないがある。
- 定例会に参加できない人にも情報を届けるため、広報紙を発行している。また、定例会に参加できない人のために、話をしたくても話せない人のための雑談会を実施し、役には立たないかも知れないが、充実した時間を過ごせるように心掛けている。

e その他

- マンネリも年数が続くと力になる。
- リーダーだけの意見では難しい。皆の意見を聞いて対応することが大切。

- 自分が動いた分だけしか組織は動かない。
- スランプ、倦怠感をどう乗り越えるか。
- 活動の依頼があっても、成果・影響がフィードバックされない。組織が大きくなると末端まで届かない。
- 小さなコミュニティでの課題解決をしていく必要がある。
- 自治会・NPO等の団体と連携強化が必要。
- 漠然とした閉塞感があるので、「何のため、誰のためにやっていくのか」を振り返り、検証していく必要がある。
- 自治会の延長線でNPOの活動をするのが理想。
- NPO法人は活動をしていくための格付けをするために取得をしたが、気持ちはボランティアとして活動をしている。

イ 地域福祉活動の場の確保

- 地区センターとしての事業としてスタートしたので、場所確保をしてもらっている。
- 公民館の設定時間が使いにくい。
- 入曽公民館の階段をどうにかしてほしい。
- 出かけたいという想いがあるので、歩いて行ける距離での場所が必要。
- 発達障がいのある子どもの社会性の成長を促すため、衣食住に繋がる活動をしているが、50~60人で調理する場がなくて困っている。
- 狭山市は子育て支援に関する活動で公民館を利用しても有料なので、入間市や飯能市のように無料にしてほしい。
- 児童館は18歳未満を対象としているが、中学生・高校生の参加は少ない。幼児・小学生の居場所と中学生・高校生の居場所は違うので、中学生・高校生の居場所をどうつくるかが課題。
- 老人ホーム等へのボランティア活動を定期的に行っている。
- 子育てサロンは小規模でも数多くあった方が良い。
- 色々な人が様々な意見を言える場が地域に欲しい。(お互いに意見を出し合って、理解しあって、解決を考えていければ。)
- パソコン講習などの主な会場が構成員の個人宅になっているので、元気プラザなどを使えると助かる。
- 地域内に利用できる拠点ができただけでも団体の発足に大きな影響を与えた。
- 元気プラザと地区センター(別室)の開設が大きなきっかけとなり、会の運営上も大変助かっている。

ウ 地域での取り組み事例や活動の紹介

- アピールできるイベントがあると良い。

④ その他

- 障がいのある中学生の居場所がない。
- 障がい福祉サービスに対する保護者の手続きが煩雑なので、シンプルにしてほしい。
- 障がいがあっても安心して暮らせるまちにしてほしい。
- 社協職員、もっと地域に顔を出す必要がある。
- 同じようなことを視点を変えてやっているのだから、一本化してほしい。
- 障がい者手帳があっても体育館利用料が半額かかり、減免手続きをするのに何度も足を運ぶのが大変。指定管理者が変わると書式が異なることもあるので、手続きの簡素化をしてほしい。
- 将来共同住宅（シェアハウス？）を運営したい。
- 車椅子の目線からのバリアフリーマップを作成しているが、バリアフリーの状況も地域格差があり、自分たちも外出したいと思っても言えない人や諦めてしまう人もいます。
- 精神障がい者のグループホームが市内にないので、親亡き後に不安がある。
- 家族から見放された精神障がい者をどうするか課題である。
- 狭山市は公園があっても、バリアフリー化など、きちんと整備されていないので、子どもを連れて行く場所がない。他市と気の配り方が違うように感じる。
- 人的、時間的コストを考えると、効率的に解決していくには、協働が必要で、社協も地域に密着した組織と協働することを考えても良いのではないかと。
- 本来、地域づくりは社協の役割。社協が地域づくりを出来ていれば、地域包括支援センターは不要だったのではないかと。
- 商店街の活性化を図りたいが、商店の人がどう考えているのかわからないこともあり、手をつけられない。
- 自治会内にある商店と結びつくと、自治会や地域内のイベントでは、大手小売店を利用せずに、多少価格が高くても地元商店を利用した方が、長い目で見た時には地域のためになるのではないかと。